胡てふ

廿四

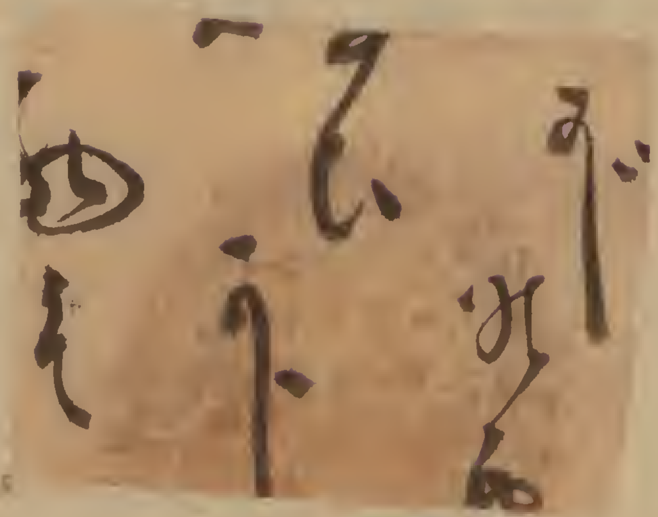
24

△胡蝶 十七 卄四 玉鬘之竪并二也花鳥云以詞并歌為巻名初音巻同年之事也

但是ハ三月四月ノ事ヲシルセリ云ゝ已云源氏卅六ゝ三月ヨリ夏ニテノ

此巻ニ見タリト云云

歌十三首



讀杜艸堂

春ノ御前 紫ノ上住町南殿也六条院新造有テ翌年ノ事ナルカ常ヨリ殊更盛ナルトし

△やよひのはつかあまりのころほひ春のおまへの有様

つねよりことにつくしてにほふ花の色鳥の

こゑほかのさとにはまだふりぬにやとめづらしう

見えきこゆ山のこだちなかじまのわたり色まさる

こけのけしきなどわかき人々のはつかに心もとなく

思ふべかめるにからめいたる舟つくらせ給ける

いそぎさうぞかせ給ておろしはじめさせ給日は

うたづかさの人めして舟のがくせさせ給ふみこたち

上達部などあまたまゐり給ふ中宮このころ里におはします

かのはるまつそのはとはげまし聞え給へりし御

かへりもこのころやとおぼしおとゞの君もいかで

此方モ盛ニニダヅリ行カヌ 里ハフリソラ(?)ヌニヤトし

外ノ里ト ムラ付テ可見外ノ里ハ春ノ花ニ古行ニシトシ三月ノ廿日比春光ヲコメテ作ル庭ノ花盛ナルト也外ノ里ヲウタガフ心ニ成

ワカキ人ゝゝ 紫ノ女房達也山ノ多ク住ヒ付ノコケヲ見度思ヒ覚トテ源ナカラメイタル舟トハ礼ひ節首ナド云様ノ舟ヲ作ラセ給トし

舟ノ装束イソギ 屋形帽幔ナド可成 アケノソボ也

舟ニノリ初し

ウタヅカサ 雅楽寮ノ人舞ヲ司ル也 職原注云ニ寮ヲ称 音律楽舞ヲ令教朗詠神楽催馬楽等ヲ司ル音楽ハ礼儀是ヲ守ル非遊戯ゝゝ

秋好

六条院

紫の上

源氏

カノ春マツソノ 是ハ乙女ノ巻ニテ秋好ノ紫ヘ也歌ヲ△心カラ春マツソノハ我宿ノモミヂヲ風ノツテニダニ見ヨト也歌ヲ思召エラルゝ也 去云乙女ノ巻ハ源氏卅四才トアリ此内ヲシミルニ乙女ノ巻ニモミヂ年ノ給明年ノ春ニ成一年拾ハ相イトミユイカドトゝゝ 此比不審ヲキ立タリシ乙ノ内ニウイデナリシテカルラカニ里ヘシリ給ナキヨシ見タリ中宮ニ立給ヘル成シ乙女ノ巻ニ秋ノ比六条院ヘウツリ給ヘルトアリ次ノ年ハ六条院スキト未有ニジ キし源卅六才ハ中宮里居ナキ成可成

龍ハ水ニ自在ニ鷁ハ風ヲ自由ニスル故名付タルニ也

こゝは花のおはしに讌せさせんとおかりのくまへ也
ついでなくてうちらうふりひわくわ花をもてあそ
びたまふなるにかゝわゝき女房たちはおほめでしぬ
べき龍舟りのを給ふて見物なにみかきのこなるに
かゝるをしかよりみなさきを給へ南殿ちいさき山を
池だそのきさきみきたまへどもみ此山のさきしまかくるま
まびてのんうしのほわとかりにみ此わゝき
人ゝあはめさを給ふ龍頭鷁首をうつりのまうひあり
ことくまうきつひてうちとわさかさひわりまへ
見ふみづらゆひさゝ髪にしぬくきてさ御わはき
なる池の中にさし出たまへばまことの志らぬ国に

きらん絵しても先にかりし鏡を見るからぬ女房
などそ思ふ中将のいわえのいはうげみさうしるきて
見まほばはうかきりしかたくきまひもたゞ急にすい
たれん座うあはこなるかなさこあひする橘花
かきはひきさわさを御にれまへ此うさはり御く
色見座をまそへき織ましたる柳枝をされ花も
えもいはぬ色ひをちゝしたるかりのはさうをすぎ
たる桜もさうはほゝゑむらうをめくまる花乃
色はもこれやうふひゝけ鏡遊花をわましてる池の
水にうけをうけるやまふ霧きしまわらかまえ
いうじたきうのまなわるほどとわせ乃はしがひたるあまれ

朗詠 柳無気力枝先動 池有波文氷尽開
花ゴ上句ニハ外ノ里ニハニダフリヌヤトキル
ハけ段向ニ有テ外ヲ見ヌ人ノ句ハ寛処ハ外ヨリキタル人ノミテ
此前ノ花ハニダサカリ及ケリト云ヒト
巳柳ニミル人モナキ山里ノ桜花外ノチリナン後ソサカマシ
白氏春中吟云 繞廊紫藤架 夾砌紅薬欄 撃枝キ桜桃帯花 移牡丹
春ノテイキテミリ

ホソキ杖ヲ鳥ノ口ニクハヘテ飛アルクト也 別ニモ岩シン波ノアヤニ花ヲ面白ク結ツカヒ也 波ノアヤトシ鳥ノ文ヲサニセタルトミル 水ノ面ニ綾ト … 汀海ニ水面ニアヤ吹ミダル春風ヤ池ノ氷モ今日ハトクラム

ヨソヘヱ 後セシヨ三人不知 百数ハヨソヘヱノメス山ナレヤ入ニシ人ノ音ワレモセヌ 手習ハ古事 也蓬莱ナアル首尾也

風吹バ 又ニ四首ノ歌アリ中紫ノ女房ヲ一ノ歌ノ中ニ入ヨメル トマヽ也 山吹ノ崎 山城又近江ノ名所也 家ノ歌ニハ近江トヨメル也 山吹ノ色ナキヤナヒモ山吹ノウツロヒテ多アルトヨメル之 蜻蛉日記云 石山ニ参ルニ山吹ノ崎ナド云ホラ見ヤリテ葦ノ中ヨリコギ行ト

春ノ池ノ歌ハ山吹ノ水ソコヘウツリニホハシキガ井手ノ里ニカヨヒタルト也

カメノ上ノ歌 蓬莱也 白氏ニ不見蓬莱不敢帰 童男丱女舟中ニ老タリ 蓬莱山ハ員亀背ニ六条流ガ則蓬莱ノ仙宮ニテアルソト也

春ノ日ノ歌ハ明也

あさひはなやぐ枝をくひてとびちがひなきしけれ
波のおもやおもん浪ましへするなどもの〱應應う
おもてとゞまがしきにまことよ蓬のくえもくぞ
いはべう思ひつゝ日をくらしき
風さえば浪れむさへきみえてこゝやなまそは
座まゆきのはま
春は池や井でのうちかまふらん岸れ
やまぶきもかへわ
亀の上れ山をたづね孫しふきのうちあり老
きぬ名をおもてにのこさん
春の日のうらゝしてり舟はさぬれ

皇麞 平調ノテウシ

釣殿 池ノ奥ナド作リテ庭ヨリ泉殿ト同心ナラズナコリシシキナガラウリ殿ヨリヨリメルトシ

錦上鋪花ト云語也 見ワタセバ柳サクラヲコキマゼテ都ゾ花ノニシキ也ケリ 女房タチノ装束ノテイナリ

霞も花ぞちらねは
あとやうのけさ事ども我うつくしさひ
ありしはしゝりかさもりへらん里もまほ達ぬべう
わのきまへ心とらほすかたとりまさはれの面よ
なきかまうち寂るわりしやうといふかくれも
志ふく我こゆるよふかもいつかずはやりとれちりさし
まさまてわれぬ家れ志はらひいはもあとつまれる
さらふかなまめうしきさはかくてのわのきん人とも
我もなどらじともくしするはうかくのことぶさを
うちまぜふれよなどらばえてわれ世あり 庭上ノ木
めなまでめけうかなはかくせはうまぼふま人

雙調 春ノ調ナリ 弦ハ堂上上達部ナリ 笛ハ吹ハ庭上地下ノ者ハ庭ニ上ニ待トルト事也

催馬楽アナタウト 安名尊今日ノ尊サヤ 古モハレ一昨古モカクヤ有ケンヤ今日ノ尊サ三昨アハレソコヨシヤケウノタウトサ アナハサメ二声也 八尊ハハレハ和ナリ ソコヨシハ只下シ人ニメウトムル詞ナリ 又手ノフシモ

などこゝろありてよえうるを聞きて人これきんゆくべきまの
限りぞはくけをたまふ夜よへぬまだいでおりぬんち
してきおの庭よりで里出ともしてぞり此まどの
うけのうへり地下ノすくく人見して上達部(テイ上ニテ)みなたちも
られをのくひおりの給きまれとわくくよき聞くふ
ものしどもきをにすぐれさ給ふおぼわ給でう
ぬあそ(たて)うへりまゝちとあ師まとせのきゝて庭以と花
庭おにゆふたてゝはなたうとはうび聞ふ雅い給ふ
うひあわゆるなふのあやめときゝぬ志摩のあをも
みかどのわるわひまなふる車乃さちどよまし里て
(六条院ノ門)色んけりえきてかくわ院此以諸物の絲を去乃きゝてへ

キュシニラク 春ハ双調夏ハ黄鐘秋ハ平調冬ハ盤渉 古今 汝ノシト今朝カラコトニキコユルハ春ノシラメヤアラタニルラン シラベトモメモキコヘヌヤウニヨムベシ 紫ノ上春ヲ好給ヒ時節ヲ相ナリ 兵部卿ハ蛍兵部卿ノ 催馬楽ノ青柳ヲ行ノ系ニヨリテシケ也 鶯ノ縫ト云ハ引ケヤ 梅ノ花笠注 抄 墨葉ニ云古今 青柳ヲカタ糸ニヨリテ鶯ノヌフテフ笠ハ梅ノ花笠ケウタラ カノハウタラヘヲケヤハチノフシニ宛 物語ワカナノ巻ノ上ニカヘリ声ニ青柳ヲウタフト云リ 律ノカヘリ声ト云ト

春光ヲ氏記給トハ六条院ハ四キ所ニ春ノ所給ト云心ニ源氏ノ中ノイヲ云リ 紀春ト花 春宮ナト云ん 心ニツウノルヨスガトハ心付テ可思ヨ子モ付テ宮ニハナキトスルカ 西ノタイノヒメハ玉カヅラナリ コトモナキテイトハ姫ノテイシ玉カヅラノ巻ニ蛍ノ君ノムヲカケ給ハントノ首尾ナリ 玉ヘンカノル人ハ多ト双地ナリ

のぞきはいふにことよまさりけるく琵琶ひとく
ありしわきらんうしよもすがらあそびはりし給へ
(呂又律又呂ニ例ルヲ両声ト云)うへ思ふ秋よ春秋(さ)にちぞひて共やかに高はを庭義(黄鐘ハ夏ノ調子也)
おもかほしおりけくうたひぬまゝあるしの
おとゞもことゝくえん給ふ夜もはきぬあさかゞけの
(呂ノ声)鶯乃さへはわを中宮は物語てく絲たう残し
ゑしたれは半も去のひりわ琵琶うあ妙へ御御庭
なまどもと諸琵琶はくふらんずれまさ物まをありぬ
ことよ御局さ人てをわわるにまし乃春の姫君
あとも何き諸あわき風おとゞ乃君もわきとおかし
あかめきてし給けりしきなどへんかな世よやぞいでぞ

サシ石ノ中ニ思ヒハ有トカラ打出ルトノカタクモアルカナ
其内ニ一柏木中將心玉ヲ見オトシラデ父ニ大臣ナドシ
蛍兵部卿ノ宮方二条ノ太政大臣ニ入タル西宮ノ卯ナリ花ノ宴ニノ巻ニ見エタリ
ナヨビサウドキ蓑ニケサウハヤリカノ花ニ心ヲイラレスル浮キトホレタルテイ海ニハ早速

をりしもまへふくあらしはなびらいふ人おほかりは
庵し我身さもわかにくき思ひはかわらきらいのひと
もうきうちつけはくるしきば見えことにいで
きこえぬふもおわりぬれえしもうち出ぬ中乃思ひ
えぬべきわきんさらなとも葉ふうちに
しとのあつうたをさうつ内のおとゝの乃中なかどい
すぎぬべきめかはれたることしこゝろおもしくは
きくのいともうせらひてこれ見とせむわひとわ
ずいそわびたまへぞうきふてゆめのいくしきみ
たまふけさもいひいつうかみてましてふちの
花袋かざしてなまひきうどよたまへ源衛さは

思ハナサノ立ツアリテ
源ノ実ハ木ノ子ト思テ我メイセルバカリノ久シクアコウトシ若ヲ紫ノ上ノ方ニモタセ
兵ノ詞

いひおうしおとゝを松ほしさ海のかなふとまつさ
小はおかきをとゞめてこゝろのほとばつくしたまふ源
すからをのぼりいでたりいうしうかてなやみけふて
思ふん侍らむよまうわかなかましいとふえかうし
庵とすまのひおけふ
むうさ花のゆへまんを志あふれいふちて見ん
あゝふん名やハおしけふとておとゝの春小ねあり
かさし花とてまれけふいひいうほえをけさく
もちりこ花あげつ庵しやとこれまは花此
わさまをもちさうてこよとさちにとゞめけふへいえ
たちわかまさたまえてけさのはありひましていと

中宮ノ御ド経ハ六条院ニテアルヽ内裏ニテ四季ノ御読経トテ大ハミニアルヽ引茶トテ僧ニ茶ヲヒカルヽトヽ中宮春宮モ同之ヽ是ハ六条院ニテ中宮ノ御キヤウタメトナヘタリ

面白しとふハ中宮のみどきやうのはじめなりけり

六条院ヘ参給人々皆御ド経ノ所六条院ノ内ニテ装束ヲ仕カヘ給ヒテ中宮ヘ参リ給ト云ヿヽ

やがてまかでたまはでやすみところとりつゝひの（花云おこシルス切紙ヽ）（紙云…アケニ非ト）

御よそひにかへ給ふ人〻もおほかりけるハ（けふナランニハ例ゼヽヒハソノメイニ改ト云ヿ）

まうでなどもし給ふむまの時ばかりにみなあなたに

参り給おとゞの君をはじめたてまつりてみなつき

源ノ御威光ニテ中宮モニギハヽシキトヽ

わたり給ふ殿上人などものこるなくまいるおほくは

中宮ノ御ド経ノ所ヘ見在ト云ヿヽ

おとゞの御いきほひにもてなされ給てやむごとなく

なくいつくしき御ありさまなり春のうへの御こゝ

紫ノ上ノ中宮ヘ御花奉ラセ給トヽ

心ざしに佛に花そてまつらせ給ふなり

紫上ノ花ヲ童八人鳥蝶ニ装ヲシワケサセ給トヽ

さうぞくわきたるわらはべ八人かたちなどことに

鳥ニハ一花云 瓶ノ名ハ花ノ名ニミメガヒテ金ト銀トニテ調ルヽク瓶ノ花ハツクリ花ト也工是ハ非作花生花ヽ

ソノ詞ニカメノ桜サウナハリトアリ

とゝのへさせ給てとりにはしろかねの花かめに

さくらをさしてふハこがねのかめにやまぶきを

オナジ花トヽ所仕立ヤウトヽ

おなじき花のふさいかめしう世になきにほひを

つくさせ給へるみなみのおまへの山ぎはよりこぎ（ちる）（和ヨミ）（紫ノ方）（舟ニテ）

出て（中宮ノ）おまへに出るほど風吹てかめの桜すこしうち

ちりまがふいとうらゝかにはれて霞のまよりたち（童）

出たるはいとあはれになまめきて見ゆわざと

ヒラバリ 平張 楽屋ア

ひらばりなどもうつされずおまへにわたれるらうを

アグラ 胡床 日本紀ニアグラトヨメリ…ナリ

がくやのさまにしてかりにあぐらどもめしたりわらはべ

どもみはしのもとによりて花どもたてまつる

出家ノ手ノ内ヘ香ヲヒチリ入後役人ニ…宮ニテハ…紫ノ方ヨリ来ル花ヲ取テアカ水ニ立タルトナリ

行香の人〻とりつぎてあかにくはへさせ給ふ御せうそこ

中将君 夕キリノヿ 中宮ヘ紫ノ御文ヲ持参トヽ

殿の中将の君して聞え給へり

昨日ハ舟ノリタル中宮ノ女房タチノ詞也紫ノ方ヲ見タル方云ヲトシメガタキトナリ花ニオレタルトハ情ヲヲリタルハ俗ニカヲヲリタルト云也

和琴鶯ナキテ楽ニアイタルト也鳥ノ楽ハ一越調也楽ノ音ヲカニシテ水鳥鶯ノ声ヲソノヘタルト也

楽ノキウニ終タルハヲハルトキ也

蝶ハ三シテノ巴抄ニ山吹ノ中ヘ蝶ノ舞入タル也非識蝶

蝶ノ舞トハ字多ノ時ツクラレシニ、イハ李部王記ニ見タリ花云花カメニ山吹ヲサシタレバテフラニラ人ハ山吹ノモト（ニイ）ヘ入トス

テフノ舞ニ感シテ後ノテフモ山吹ノニセヘ舞入トモ見タリ鳥ノ楽ニ池ノ水鳥サヘツルト云ニ対メ可見ト

（紫）花そのゝこてふをさへや下草に秋まつ（中宮ヘナリ）
むしはうとくみるらん宮かのもみちの御かへりな
りけりとほゝゑみて御らんす昨日の女房達もけに
春の色ハえおとさせ給ましかりけりと花におれつゝ
きこえあへり鶯のうらゝかなる音に鳥の楽はな
やかにきゝわたされて池の水鳥も
そこはかとなくさへつりわたるに急になりは
つるほとあかすおもしろしてふはましてはかなき
さまにとひたちて山ふきのませのもとに
さきこほれたる花のかけにまひいつる宮のすけを（中宮ノ大夫也）
はしめてさるへき上人ともろくとりつゝきて

中宮ヨリ紫ヘノ返也
古今 我宿ノ梅ノ梢ニ鶯ノネニナキヌベキコヒモスル哉
此ノ作ヲモノヘダテ、ヤメタルト云ヿ也
紫ノ心ニヘダテナシハコテフニモサソハレテ行ントヨミ給也
名ニシヲヘバ八重山吹ヲウカリケルヘダテヽヲレル君ニヨソヘテ
中紫ハ上﨟ナレハ巻首ハ不似トハ又労ノ字ナレバ切ヲツミ給ヘル所カナレハト云ヘヌハ不堪也
ヌ地也

わらはへにたまふとりにはさくらのほそなかてふ
にはやまふきかさねたまはるかねてしもとりあへ
たるやうなりものゝしともにはしろきひとかさね（足袴イ 巻タルキヌヲコシニサスハ故ノ名也）
さしなとつき〳〵に給ふ中将の君にはふちの
ほそなかそへて女のさうそくかつけ給ふ御かへり（モカラキヌニヤ）
（文云）きのふはねになきぬへくこそは
（中宮）こてふにもさそはれなまし心ありて八重
山ふきをへたてさりせはとそありけるすくれたる
御らうともにかやうの事はたへぬにやありけん
思ふやうにこそみえぬ御くちつきともなめれ
まことやかのみ物の女房達宮のにはみなけしき

あるおくりものどもせさせ給うけりさやうのこと
くはしくまねばむもむつかしあけくれにつけても（筆者ノ六ケ敷旨不書トし）
かやうのはかなき御あそびしげく心をやりて
すぐし給へばさぶらふ人もおのづからものゝ思ひ
なき心地してなむこなたかなたにもきこえかはし
にしのたいの御かたはかのたうかのをりの御

フカキ御心モナ　同云　玉ノ心ヲフカキニヤアラン浅ニヤアラント畢竟ハ難計ノ心し　花云是ハ玉ノ心ヲホメタル也フカキトハ人ニアザムカル、比称ナリ　ナキトミアサキハナツカシク人ノ思付方アルトノ心ウアリトハラウ〳〵シキヲ云

對面の後は（紫へ）こなたにもきこえかはし給ふふかき御
心もちゐやあさくもいかにもあらむけしき
いとらうありなつかしき心ばへと見えて人の
心へだつべくもものし給はぬ人ざまなれば
いづかたにもみな心よせきこえ給へりきこえ給（玉ヘケサウノ人）

源氏ハ二モ親計ニスグヨカニハアラジカノ心カラシトナリ

ふ人いとあまたものし給ふされどおとゞおぼろ
けにおぼしさだむべくもあらずわが御心にも
すぐよかにおやがりはつまじき御心やそふらん

内府ハ孔子トノ人ニモシラセテ佐好色アラジト思ヒラント双地し

ちゝおとゞにもしらせやしてましなどおぼしよる
をり〳〵あり殿の中将はすこしけぢかくみすの
もとなどにもよりて御いらへみづからなど
するも女君はつゝましうおぼせどさるべきほどゝ（玉ハ不見兄弟ト知給ハヌ）
人〴〵もしりきこえたれば中将はすくすくしくて

柏木タギリニモヒカレテ六条院ヘマデ玉ニ心カケタルトし

思ひもよらず内のおほい殿の君たち（柏木ハ）（タギリ）は此君に
ひかれてよろづにけしきばみわびありくを（玉ヘ）そのかたの
あはれにはあらでしたに心ぐるしうなんひめ君は

ありしほどはおほかたいまさのおやははもこゝろさ
まわりの人のおもとと人きまびんようけなくまどうやう
りもしはべりひとへにうちとけ（原ヲ七）みえ
やさしき女むげにおどろかせずりわがなすわ
小舟とはかけまれどなれそめのけりひよりいとよく
ながれてこれよりつめいてさぶ侍ぞひとへふ（卯月）なども
（母タ白、今玉ハ一扇メキ名トヽ）がくのいまめしうきたまままふらなかひとりの
気色なども、あやしうこゝろのうちなく、おもの銭哉
のどやかにおはしませば、よ侍りの御あうびかく
すぐしけるに、玉への宮の御かたより人々の、けふみえしげれ
なかりけり思ひしすとおもしうおぼいえども

すまゐば渡りなばはべらんしさるべき義にはべらん
ましうのしきこえたまひなどけるをうちとけず
まかしいあとりおぼいあわせ給ひし歌乃宮れ給なく
（一心ノイラヽトイソガシキん　アブフーシイソグ二義）
いとゞがましうきまびおぼさせとの義おぼめなくふ
はち文はけ読んしつきてこまやかにいひたまふ
（ハヤウー　太ト三同　能之音ヨリ兄弟投　多中ニヘダテナキ　トヽ）
はやうよわ御ただはるずなうあまりのみこたちの
はゆよ宮をなんうるゝよとわり義て思ひしよ
たゞおんやうのはゝちのあとなんいらじすへぞそ思ふ
姉ひて宮ゝし哉よ世すみありあくは義姉へふん
ざん哉見るがおほしう志かおぼゆるうかなきは
あゝわ女どやすめふほしもゆくあらん母乃うれ

右大将者云ノ一人
言立夜人殺ラ云ノ
道ニハ雅忠王ヘ文
ンシ玉ト云
三ノ山ニハ一　花云
イカバカリコヒノ山路
ノシゲレバヘト入ヌル人ニトフ覧　今案孔子ノタウヒト云フ一昔日ヨリ世ノ一ワザニ云ツタヘタリ
孔子ホドノ聖人成ル時トシテタフル、一アル如ク然里モキハメテ実ノ人十ノ民ニトフ九ヘシ
クシノタフレナ文字
ルミネ及ベシ徒抄ノ
セフワ皆アヤニリ

みこまかにまうさるゝ楽をうけすべき人ハう
世のおほく孫のとりしき事侍ん人のはかなく侍るやと
まうす人いめで思ひぬへくやもまうさん思へど侍く
ましく乃ゝおかいかに右大将のいとまあ座のり
ことくしきさ侍しける人乃ころの山ふはくて
乃たうまさま給ひは座を氣さたりけれへうちもさ侍
うちよおもし中にもなんくるへ思ふ井よう乃
きなさのうみんのもとなほかしうさゝふかうまは
へ侍給へとあうをちいけくもなびさ侍はわれい
いのなれバうくもまとぼのまつ侍にかとそ御事は多
給へ里ま給ひとおもしうて

此等ヨリ右大将フヲ
出石モル中将ト云
當定右大将也

おりふとも君ハまことしかわ我かくあわ君も侍
れの色しみえ給バうおさ侍給ま免うしう拙し御達
たわされハ給ひのなほかと思ひやもと給へどたまのく
まうりのもきて見給ひは右をめしいでうあやうふ
なと侍進我こえんひとなバひとえらしていらへ
ふどいをまかせらすきくまうあさまあまじき給まの
やうれ事ののんないまとましいそふどするなのこ
乃とおふしもあらぬことなれ我まて思ひしにはな
なきけなうしめしうとそれおわれうらむまんなる
すやもしいめさ侍しうはべき我まうけや多う
などもおおえけまわさ中うぬりかうてなふてふは

ワザトワカ・・・
見ヨリ後ノナントア
リヌベキワホヘトニ云
とニハ男ノ佛ノ人ネ思
シテ時ノ花ナドニコト
ヅケテフト文ナドヲ
一みナドヤリモシナキハ其間ハケヤケウ思民後ハ
一くフカク思ハルトトモトスルモ人〻ニ可依

コシメルニ女ノ実義ノ心ヲ忘テモヲナヲモセザレバ男ニケジ玉シ井ニテ亦ソノオモハザルヿヲモツヨクムカヘリテ必大タリ出来スルモノ也
アラニシニ不迷モヲヲシテ男ノ心ヲ和ケタルカヨキ也ナヲザリナノモヲヲシテ重テ乞ヲセザルハ女ノ本ニテハナキト也女子ノ心ハ中道可然ト

はきなたよわごとはかへりてなかなかひとわ
中こゝろやうにもはわがまゝさへまよひめき
なまめかしからん物のたよわなるわれなからさわ
おどりくちとうきかへりはえさりとてもさらでものわぬ所
うわくふのもちなんとあわぬべきわざなりけれべて
世のものつゝみをはかへりまゝなる物の数ならねわ

けニ人ノ人ニハエアナくハ
子ニ比ク也
サリアルハ名ノヿ也
ニ云出人ニハナキト也

うかはく見たかのしきこゝろをもえしらんなんそれ
はりわあはれなうるべき事とも宮大将殿はなくくあを
さわるをうち出たまふべき事にもあらぬを又はまを
ものへなどあるぬやうなんもはわわちまふうか
へるまきへよわしもいかへりふしのをもむきを

花ムナデシコハ面紅梅ウラ青也サホ花色
ト八四月十日ノ卯ノ花
ノ小ウナキニ云ヽ

サイバラ前ニ
イ中ビザルト云タル首尾
ニヤサイバイドイヘデン
タル所モアリタルガ今
ハ其名残モナクアリ
ノミニ大トカ云テイ也

アカヌ所ナク　花云不
足ナル所ナキト也
花ヤカニウツクシキ
玉ノテイト云ヽ

ちさうひてはまれなるもかなしたまへらうかもなかたうへ
あくなどまいらせ給へたまはいうけしきまそおはせる
うはめいとおかしげなわなそもしらみえたまうなすがは
きらゝなる花のいろなるはこうちさわりひきたうう
はまめきさわてまのしなどもさはいゝかすみなうひ
たまへるまじきなるあうかてわかおはしかなり
うるみのえきみえなるひはぎ人見あたまをえむわ
おもふまにいとはまようるまひうふけさうなども
ゆしてもてはまきなくまたいとほりぬはなくてあ
春のふうはくゝげなわれと人ゆきうえさんきゐめし
くちおしう思べうおはする在もう見ほまかはく

えまゐて おや（太上羽）と定むも心はけなうわろくおはし
侍とめわざかゝつらひ給へらんかしとひはじめて
あはれしと思ひぬるわらは（太翁）べみ人に侍せうそこ（妻ニトムト云ヿ）
などそ実えはふふことはべらずば多くも志ろ
めしけほどしはべるてはまゐらぬをかはし
たゞ見送くえんもいひつゝとて侍文ばかりとわいま
なごし侍めれどけかへりさをぞ参うえさ蓄（源ノ又、父宿トキ也）
孫子新ばかりなんのれをふかくしいことよおほ
いふほど世御（源羽）ぞこのやうかもとぼつくえ（前ニアル柏ノ父）
さほ是うかういかいたる気色の御とほく
思えて御覧ずまばか（太羽）まはしう給くとであて

玉ノ前ノ呂光ノ名ハミルコト云女柏ノシリ給ト也

まあわれにかばかりはさうの内のおほとのゝ中将（柏）のこれ（女ノ母ノ父ヲシウチクシキメルトシ）
さかりぬ見ることをさとすわれし呈人魚すへ呈なる
はべらんにさて侍るまゝみいふ人も侍らざましに（スムナハ兄子ヨリニゴルナハ柏ノ父ヲニゾミル人モナキト也）
ようど御縁まだいと屋うたまさとのかな猿うなわ
せうれめしたちなかいのいとさはりしたかめん（柏ノイシサシテけ可未右ノ中将ヲ殺カ）
出ゝゆうい色見きの人これおかしありかなしくしも
なき娘まじきしうおほうまさは中のわれいとき川
まわかる人あわれをのばしう思ひ何くする世もあう（後ニハ実ノ兄弟ノ一二知ト見之心也）
あれけちえんおはあいでこういひまきえさあめ（アラハレタルハアラハニハアラデ也）（柏ノ父ヲ）
霞まあはふかくこか義うかなやとえんまもう待なき孫りは
あうなる屋のやと覚ゆる者もおかすかやあらんと

唐ましき博士などよそへてまさかり侍りしとも
まうけうわりくちをしう物となおぼえしかどよそごとらとし
唐孫へ侍ふ流守有りさし出給りん身はいみじく思ひ
めぐらし侍ふ程よ七人のはめふりしよさふまわて
よういヽ人く志うさふ唐家はいでも思し給えめと
思ふを言ひはひとわかりのしまふやうなまほど人かう
いといふりはぐさめいろくかよひ給ふ折はまいる哉きこえ
忽しうやくふくけなる日のわすれ人どもなん
うぼはまうさゆるさやうなるんきといふくげなう
ゆんふをいふ侍りむひとはいとようなぶらうまで
けちてん侍しきつ給りをせはわてはひとり

あけまぬべき事なんなのはかりいそでまぬべき哉
それはんはうひなんあはひべき大あいとし唐さ侍
人のいたう給ひは哉ふ侍をいとひかてうよもとも
なまめかしそまもひとふわづらりうはなあはもわべ
いうとふれはさ侍くふあん人きまほおりひさため
うゐねふうりはまの志とくいかやなふどうりもさりや
うよ我思ふさ侍とそすゝわいそがき哉ことなまめかしと
さゞうのはよりひふもわいばとはなどのなふいと
侍もはんふいまめ給をさらんま給をせうしさ侍よ
ふぶらへそそく事と思なひ給へはんふありざらん
志と老まうれ侍しきかどいとまあやのまそやすく

かへたくなしうて御いとへ我こえんともおぼえ
給ひしにいとまうくしきもうちておはしてなよ
うすも思ひまつはりさわかゞふなどまはおやあどい
えぬりのかなしひ侍てどもかくも思ふ妙へしまれ
なん申きて見給ふ歯のいとおいしうなればくまと
おぼいてさうしふが世のあとひのちれどうまでとおほ
いそぎ給ふりあかしぬんづしのふどもみありしまそ
給てんやなどうちうさらひ給おほすさ給れすい
まばゆけきおぼえうちいそ給ひけ気さあはことげ
ときくまき給へどしゝぬはまなまばむくろよ
うちあげかきてわりん里給ひおまへちうぬくまさけれ

卯月ノ首尾

六条院内ヘ子ヲカクノ
台カヘツキタル玉ノヨ
ソヘヤナヒカシノトん心

朝忠集 イシ世ニモ
アラジモノエヘ右竹ノ
オヒカハリテル春サ
ヘソウキ
実父ヲ尋度心
一向添ヲ頼ムん

いかしわの屋うみおもひたちさうはなひくはまのなろ
うしあまたちとまかなまふて
まちの花有給ふかくう色しうけのうれ、
そのかよくもやあひわの限べ義おもんばうつめし
うんいとうしとうれをひきは着て宮え給へば
弁ざわ出て
むらうよいりなるん世のわの行れおもひしめ
きん給なつばうつもん中有まうありめとまえ
給をいかし共とおがりくわうの宿も出う給のうち小は
うちもおもりはうしいのおからんおわかやさしいでんと
ましうむとあうなともなく共命しかうこみれおとどの

はゝう程ぞん比いとあはれなる此比我とも思ひ内のに

りとよわ見なまたまり然まえかうしもこ日あの

なうびあもむりし物語を見なふいもやうくく人氏

いわふま世界比お給やう嬉し里なれ共いとはく（住吉や浪ヲ合）

まうきゝ程は思ひまたそまはらんことをうる

うばべう物すいとゞらうすと思ひ我こえ

なふぶうん小もう里中なふあやしうな清のしこさ

人氏いわふま小もあ給ゆ夕顔いみへ比はあまね

まるけどゝ程なくおわしこの君きものゝある

さまも見し思ひぬべくけちうききゝ程は出まうひ氏（人受）

うし程めこうしばゝうゝ内まなど御覧たまふぶ（紫人）

ましもおぼすまーきはんはゝまどうしまたまへまで

おかしよわて紫のむらさきえいゝくいものたまふ（紫詞 主ノあお人ノ机ニ源ノ硯箱サアラバ源ノ手ニナキ了シリナカラ… 源ノ好色ナレバ…ナシテハ不叶力ノ外ニテ詞ト）

めぐるやうなくしもうちとけみえゝ我こえ御覧

こゝろんくるしけれど乃ゆへまうとみえもし（源詞）

けふくやいはゞまいりこんぞなへはいでやはせ（紫詞 紫ヲモ昔姫ノ体ニ云了）

みてもまゐらせのびかゝうものおもりしきわく

あはしはんさ日の思ひいでゝはかくなく

底なとはつ見そ突へ我へなんとおかいそ（源ん 紫ノ心ノ利発ト）

ぶしても我しとはうれしきんまゝすもあし（源詞 両義 無ポ果ナラヌ知タニハシテ 又源ノ好色ナキ了ヲ）

よてま侍りしなれば乃竹ひさしてんみうちよ人の

うう我しはうわたまふ小もいうしはあべうしむと

白氏
四月天気和且清
緑槐陰合沙堤平

おかしかんたまうはいひかくしもうきしうくぬ家
こし路乃程も思ひしこし達給ふならは心ありうしき達に
ましありしはしく渡ま給はへえるてま津ま給ふ雨は
うちふかうるにこわのいもりの志めやうなるゆふ
はかなさ浦まへのわのおさえそうしいきなどの何紙
庭のありしかわあひ給かなるとなくこ槐よけ
なる雲紙見いぶしたまひてましては露よりしも
ひしたまふてきのはこのひあきえれ清さ庭の白ひ
庭のけさをおかしいそられて侍るの志のひやうふ
わたわたまへ玉なるひなどしてうちとけ給へま
たるをおきわが給ひてたちるひ給へ侍るのかれさ

五月一万花橘ノカヲ
カケハムカシノ人ノ
袖ノカソスル
橘ハミサヘハナサヘ

はひいでもおかしきにこ庭のなるきりひのふとむし
おかしいでて遊しみも志けびかくそみうめたて
まはかしはかどうしもおかけ給りて思ひしを
あやしうたぐひれのと思日まかへらふくおもわく
よろおれ先なるわき殿のわ中将乃さうふむし
ざ庭のありかひともみくぬなりひよさしとふぬ
りのやう初のふりの人も物したまふなる
とこて添ひか見給へまはさのさなる清くさもの
なりよたち花の浮るをまきくかて
うち花はかかまし袖にあるふまはうはまうる
ともおもほしぬよふらやくりのんかうけてま遊

源ノ毎ニ似タルト宣フ母ガヤウニキコエシトシ好色ヲアヂキナク思召シ

かく参りなぐさむこともなくて過侍るとし比は
かくてみる程は夢かやとのみおもひなれどかく
えいふまじけれどおかしうともなよとて涙
とうへまへまゐらせうやうもなくひたまいざ里
侍るをりとうしておほゆまじかりおかしからぬあるさま
まそとのし竹ふ

三

袖乃香をよそふるからにたちばなのみさへ
はかなく成もこそすれと思ひてうちふし
竹へふ侍まいらしうなりうちはらへつぶく
此はばかりもせまへふみあわたゞしはかれあまやりよりは
くしげなくにならくなかに物思はるらまさらし

男ニカホドノ

給ひてのちはほとし思ふうち家へもてゆき給ひける
女はいかうくいりてきんゆるおぼしてわなゝきける
気色もしるけれどなかにあかくうとましとは
おぼひふかうとよくもてかくして人にもみせざりけり
べくもあらぬ給のみどりよさわげなくてなきて
あくし給へあきらくも思ひやるさまぬんざしかまへ
うみへ気色世にぬぐひあはまじきんばなんするを
時をとはまゆる人にかはおかしおとにくべきやは
あはれとうふう気んあはれ人は世にはわかるさのは
べきわざなまばらし給めたくこうとの給ひせさうの
ちうなるほどおりや心なるわし雨は戸ここ風吹さけよ

好色ノ心ヲ係ク

ヒゲヲ黒スアホ
我玉ヲ早振ニ

玉ノ係ヲ係ハ行ラハ然ルアルト

風行ニナル
風生竹夜窓間臥
月照松時臺上行

なかなど乾座のまへにさし出したまはゞほどなくけおとし哉
よれさまもしめ座のなかにありしくてこそ座のかたは
御物語にうしこまわをきてくかくもさう
りばつてけ小兒にわれ御中なきかくよ都
しもあわずさくきばあとふりそ竹へぶつ舟での
はひさしみるあかつきやなほしいかどなるすぎ
ものけりひさいへいもようまさてけしす座し給て
ちの座のありふし　たまへだいどこちう候うく人也
おもりんことゞめつゝうないえじうお母の織也
おやのれわるわなるまじうばなるうふいえりれち
たまふともうくぶさまのうきことなるあるまじやと

かなしきようくむとはまいらせがまいりそではいと
ものうく候ぐのしき御くしきなればかりおかせまゐらす
はらけなはなそくなまいらせぬひとゞまとこれまとりもさ
にさくみんのゆるはりさへのもぜかくとへめさむは
ましきよりづりみえたそまつふやなよ乃うとまし
よる座ぶなぐこれもわはなかちなほて候いよもみを
なるしおかなけよしのふ候ありあまる孫をなく
さむるうやとて見まゐらせなるうしう浅きこえ給こと
お母うわまでまやうなるけりひいたゞせうしの
さつもちしていわしう宮にわ家はんなかつもをくわ
すふわたりはならすとおがしさつぶまいらせよく

後セニ ヤキリナク
ナニオフ藤ノ花十六
ソコイモシラス色ノ
フカサカ
月 玉モヤルアニニ
アラ子トワメヅ海ノ
ソコヒモシス入心抄
ソコヒノヒハ休字也
ソコトモシラ又し

あやしうへしは人もあやしと思ふべければ
いとう秋もぬかさでいでたまひぬをりひうとみ
なほはずいみじうなつかしうなるべけれども人は
うゝなまくしくいあらぬものゝよかぎりなくう
うひまつらぬんずしきまゐらせひとけれどもの心事ぞ成には
よもあらじとぞおぼゆうしこひしさえなくさめり
その夜な事もえこえんあなづしきつたりいつ庵
なども御たまへといひとこあはれとをかしう思ひも
はてぬさましていとゞうしとお思ひたまはざりけり
かゝえそでもはらぬ御心ちんぞいとどちよなくも
かくれんなふ庵のあやうかれとあげさ給ひてゆめ氣さ

かく人ナラバ其心モアラントし

トノハヽ 玉ノ名ヲ
ツゝショリ来ルアテキ
今ハ兵アトスカ詞ナル
ヘシ

なくさとていで給ひぬ女房もいとしきうすぐし
たまひかしこほどなき世事をきこえたまはぬ宮にも
すうしうちはまゐらせる人々もわけ侍まをただなかえわ
なりまばこれよりわけちゝうきさこまよかもおぼしまえば
思ひのかぎりかもいはむきる夜の月とあげおしきよ
いとをしきもあしけれど人々はんちかやましげに
みえたまふとまでなやむえこゆかりのいと氣るけ
こまやうりかくこそげなくもおりしまんむかしとの
はかなやと思ふともはつよりばかりおかしまうぬ
うとなくえもてなしえおぼしなど世中などとも
しのびてえこゆかより侍ていとゞおもひまさりけん

本ニタガトケテニ
下タムスボホルラン
面白言葉也
ウラワカミネヨゲニミ
ユルワカ草ヲ人ノムス
バンコトヲシゾ思フ

はなのあさきはんにゐたかさまとうとましう思ひなそなる
小も方武んまうわたるまししにしたは文とくあは
なやましけ侍てかしたまへまとくはすゞ里なと
来わてはかへわとくと此御まほえふくよ見なふ
志務秀かく此うり遙き（ウハベハスクシシクトシ好キアルトゝ）おいしうふすくしきみ
いせめてたうかいなへわたくひなのつましれくしま
こうはしきしもやまがきうけのふ人見まわくらん
うちとけて（若草ノ根ニナルヲモタヤ）わかぬ歌わの草のまとある（玉ノテイシ）
すかふむはぼくはらんおき風まこそりのし給ひ
たれとさはかるおやすわたるは言葉もいとよく（玉ノん源シ）
心見なそはりん里しときこえさるむも人めあ座し

六帖　朝綱集ニモ有
玄ワビヌ太田松ノ
大カタハ色ニ出テヤアハントイハニシ
太田ノ松ノオモハセタルニテハナクテ
思ヘルナリ

けれバふくよりなるゑちのをふるみりくるでなけ（文云）
ふ給りわぬみづわこゝ穂のあしう侍まバやすへさを
ぬ心乃ゝあはむりおやうのくしきいはまだのふすぐ
よう也とほくえみそうしみ侍ほうぬちし給ふも（宮玉ニアイ給トキハウラミノタチト思玉ハン）
うしておほかたはいろに出給ひてのちいおもふれ（カヲノムハ色ニヤ出ニシトアラニシコトニ云ル也亥ノんハヤ色ニ出テ云ハヌヘハ六ヶ記トバ子細ヲシリタル人ハスクナケレバ源ヲ親トハ思ニケリシレタラバ人ワラヘト）
まほのとおもえきたるさとなくむつりしくきこえ
給ふうおほうれないかゞにも春ん穂してきさ歌
なお想也ひはあそいとなやましうさへし給ふ
かくてことの心ある人はすくなうてうとききもさ
しきもむ心乃おやさ殿よ思ひやえたるさうやう
のくしきれもわれそなげうう人わくりまたにうき

名もあはべきおちゝおとゞなどのみづからわおほふ
めでもまめなくしきほんりんへかもあらざし世粘
うきましていとあはれげうまちきておほさんす
とよ給はゞ小屋ほげなうおがしみずは家大臣などまゝ
（切芸ノイシサ役ハバ）（係ムヲ太臣ニノタニラヲ付テモ前ニトイソグニ致）
とのくわ気色もてりれまねさまにはえん文給ひて
いとよんぶ給に歳こえ竹ふ（双）みのいふも御中将を
（原ノ名前ニムマトニム氏ヰ拍本ニハヲトラ于氏ノ詞）
あそびの御ゆかしきゆへそうふるとまわりかの
守て織（兄ガ）のいちをばさうじたゞひとへようわらくそ
おわたち（玉ヲ）うき見薬のこゝ近どひあわわためわ